



井勝一郎全集

第十四卷

講談社

# 龜井勝一郎全集 第十四卷



昭和四十七年五月二十日 第一刷発行  
昭和四十九年二月二十日 第四刷発行

定価 二三〇〇円

著者 龜井勝一郎

発行者 野間省一

東京都文京区音羽二丁目二二二  
株式会社

郵便番号

一一一

電話

東京〇三(55)一一一(大代表)

振替

東京三九三〇

講談社

郵便番号

一一一

東京三九三〇

信毎書籍印刷株式会社

大製株式会社

印刷所  
製本所

著丁本・墨丁本は  
お取り替えいたします。

◎龜井勝一郎  
昭和四十七年

Printed in Japan

0395-135145-2253 (1) (x1)

龜井勝一郎全集

第十四卷

編  
纂

山丹中河  
本羽村上徽  
健文光太  
吉雄夫郎

第十四卷

目次

## 中国の旅

鳳凰花の咲く道	一五	蘇州に游ぶ	一五
革命の播籠	二三	上海の七日間	一六
北京の宿で思ふこと	三三	人民公社	一八
歴史博物館にて	三九	アジア・アフリカ作家会議	一九
万里の長城と明十三陵	四三	再び中国へ	一九
星々の火	四三	北京滞在日記	一〇
空から上海へ	五六	上海・廣州・深圳の別れ	一五
魯迅の墓	五六	後 記	二六
毛沢東主席との会見	七〇		
	七〇		

思想の花びら——もの思ふ人のために——

もの思ふ人のために……………	〔三〕
幸福について……………	〔三〕
自然と人間……………	〔三〕
歴史と人間……………	〔三〕
健康と病気……………	〔三〕
私たちの言語生活……………	〔三〕

## 歴史の星々

歴史の星々……………	〔三〕
日本語の神……………	〔三〕
美女の原型……………	〔三〕
さすらひの舞姫たち……………	〔三〕
内乱孤児……………	〔三〕
行方も知れず……………	〔三〕
当たり前のことと言ふ名人……………	〔三〕
民族の春……………	〔三〕

矛盾の勉強……………	〔三〕
義経はなぜ美男なのか……………	〔三〕
古事記から流行歌まで……………	〔六〕
ゲリラの名人義経……………	〔三〕
怪物・後白河院……………	〔三〕
美化された主従関係……………	〔三〕
「美男義経の生れたわけ」……………	〔三〕
義経と西行は会つたか……………	〔三〕

断想

これぞ国民文学	一五
織田信長暗殺の黒幕	一六
史上最强最大の組織力	一七
戦国のサディスト	一八
死なうは一定	一九
秀吉をアゴで使ふ	二〇
連歌師になりたい	二一
歌を忘れた伊藤博文	二二
明治最大の誤り	二三
百年	二四
戦後日本の欠陥	二五
民間の知的エネルギー	二六
近代日本の悲劇	二七
歌よむ罪	二八
万能人への夢	二九
信仰と結ぶ生産技術	三〇
新しい国づくり時代	三一
知的運命のために	三二
断想	三三
断想拾遺	三四
断想片	三四
わが友に送る断章	三五
断想「」	三六
断想章	三七
様々な感想	三八
断想「」——回	三九
美の捉	三九
断想	三九
断想章	三九

## 拾遺

断想	一九六	論争についての妄想	三一〇
思ひつかまゝ	一九七	一粒の麦	三一一
断想	一九八	世	三一三
思想三つ	一九九	民	三〇四
吹雪の中	二〇〇		
蒙古人と北京人	二〇一		
晩秋二題	二〇二		
津軽海峡	二〇三	防空壕	二〇三
武蔵野の春	二〇四	疎開の荷物	二〇四
飛鳥の春	二〇五	鍊	二〇五
僕の仕事部屋	二〇六	芸術品としての南瓜	二〇六
北方第一線	二〇七	嘘偽見機について	二〇七
わら	二〇八	美について	二〇八
ひ	二〇九	日記	二〇九
	二一〇	家族といふもの	二一〇
	二一一	ドストエフスキイの流行	二一一

無用の負擔	観	函館八景	古寺を巡りて——十五年の思ひ出——	古
近頃雑感	観		ゆきま考	ゆきま考
奇妙な社交——東京通信(一)	観		つれづれ茶	つれづれ茶
武藏野に郷土博物館を	観		倫理学	倫理学
カイロより慶州へ	観		多情仏心	多情仏心
わすれ得ぬ土地	観		芸道雜談	芸道雜談
鮎つり	観		古書	古書
ノーベル文学賞——東京通信(二)	毛		時代の流れと自己形成	時代の流れと自己形成
架空印度留学記	毛		私の雜記帳	私の雜記帳
歴史と風景	毛		觀世流「春の能」をみて	觀世流「春の能」をみて
或る危険について	毛		乱世の芸術	乱世の芸術
乱世	毛		日記より	日記より
古典旅行	毛		私の机の上	私の机の上
午前の私	毛		気になる白髪	気になる白髪
井の頭の水	毛		中世	中世
白亜の教会とボプラ並木	毛		早春の感想	早春の感想
東北地方講演旅行	毛		美術がわかるといふこと	美術がわかるといふこと
雪また雪(山形)	観			

思ひつゝまゝに	相撲見物	〇〇〇
講演といふもの	バックボーン	〇〇一
それは一種の演戲である	初 心	〇〇二
それは一種の知的娯楽である	講演の方針	〇〇三
茶道の若さ	思ひ出の詩	〇〇四
感 想	わかりません	〇〇五
高野山 聖地、觀光地、墓地	語学をめぐつて	〇〇六
石 筆	ニュースといふもの	〇〇七
ひとつの空白	私の憲法記念日	〇〇八
式典の工夫	少數意見	〇〇九
市民の美的権利	看板への対策	〇一〇
納稅と世論調査	ベストセラーズ	〇一一
中学生と就職	教科書批判	〇一二
建国の意味	國土の美化	〇一三
代議士の質問ぶり	國鉄争議に思ふ	〇一四
テレビと礼節	道徳教育	〇一五
風景・動物・植物	敗戦と日本語	〇一六
うつかり忘れてゐること	年をとる	〇一七
最高裁のあり方	人を叱る	〇一八

本の定価	四六	北方の海の旅愁	五九
ユーモアについて	四六	酒の肴	五〇
平和の象徴	四九	耳と眼	五一
人工衛星	四九	私のみた佐渡のよさ	五三
勤勉な国民	四九	参会者 桜桃忌の宴	五六
汚職のおもしろさ	四九	飛鳥路 私設芸術的国立公園	五六
いうこも同じ	四九	この夏のこと	五九
年月の早さ	四九	テレビの焦熱地獄	五九
宗教的エチケット	四九	桜桃忌	五九
東方の博士たち	五〇	海峡と馬鈴薯の花——はこだての風景——	五九
年の暮に思ふ	五〇	北海の旅より	五九
八百長	五〇	毛ガニとにしん	五九
芸術保護費	五〇	霧笛と啄木の像	五九
談話の伝達	五〇	真夏の仕事	五九
新しい学部	五〇	古寺古仏のなかの旅情	五九
漢字といふもの	五〇	中立といふ観念	五九
建築への夢	五〇	日本人の精神史研究	五九
やゝ病身	五一	雪国のトンカツとスキー	五九
写真をめぐる思ひ出	五二		

解題



中  
国  
の  
旅

